

「異邦人の時」 ダニエル書、黙示録、2テサロニケ

**1A ユダヤ人の拒絶 ルカ21章24節**

1B ローマによるエルサレム破壊

2B バビロンによるエルサレム破壊 ダニエル書

**2A 帝国から御国へ ダニエル書**

1B 人の栄光の後の御国 2

2B 獰猛な獣 7

3B 荒らす忌むべき者 8, 9

4B 大いなる戦い 10-12

**3A 裁かれる獣 黙示録**

1B 竜と獣の国 12-13

2B 上に乗る女 17

3B 火の裁き 19

**4A キリスト者の姿勢 2テサロニケ**

1B 苦しめる者への苦しみ 1

2B 引き止める者 2

3B 愛され、選ばれた者 2

**本文**

私たちは、キャンプにて思い巡らしたいことは、イエス様の約束された神の国であります。イエス様が私たちに祈りなさいと命じられたことは、「御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行なわれますように。(マタイ 6:10)」アダムが罪を犯した時に、罪と死が世界に広まりました。けれども、主が私たちの罪のために死んでくださり、甦ってくださったことによって、新しい世界の幕開けとなりました。主は必ず、ご自分の住まわれる天から戻ってきてくださり、そしてこの地上に神の支配する国を立ててくださいます。

**1A ユダヤ人の拒絶 ルカ21章24節**

そこで、私たちが知らなければいけない、神さまのご計画の一つになっている、「異邦人の時」についてじっくりと今朝、また今晚、学んでいきたいと思えます。異邦人の時とは何か？その言葉を、イエス様が使われている言葉をまず読みたいと思えます。「ルカ 21:24 人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」

**1B ローマによるエルサレム破壊**

これは、イエス様がエルサレムで十字架に付けられる最後の週に、神殿の見えるオリーブ山か

ら弟子たちにお語りになった言葉の一つです。イエス様は、エルサレムが軍隊に囲まれて、それが滅亡することを語られました。それで今の言葉を語られました。エルサレムにいる人々がローマに捕えられて、エルサレムは異邦人の支配の中に入ります。これが「異邦人の時」の状態であると言われるのです。

話は、創世記に戻ります。アダムが罪を犯したその世界に神は救いを与えるために、アブラハムを呼び出されました。アブラハムを祝福して、これを大いなる国民として、そしてアブラハムによって全ての国民が祝福を受けると約束してくださいました。そのアブラハムの子孫がイスラエルであります。主は、アブラハムの後にダビデを愛し、選ばれました。そしてダビデには、彼の世継ぎの子に永遠の国を与えると約束されました。つまり、神の国です。このようにイスラエルから出るキリストによって神の国を立てる約束をしておられました。

ですから、イスラエル人は自分たちのメシヤ、キリストを受け入れることによって、その祝福されたイスラエルによって世界が祝福を受けるように、神はご計画されています。神の国が、栄光に輝くイスラエルによって地上に広がることを神は望まれておられます。ところが、ユダヤ人は何度となく主なる神に背を向けました。そしてイエス様をキリストとして受け入れず、死に引き渡すことをユダヤ人指導者が決めました。このことによって、神はイスラエルによるご自分の支配を、一時的に、御止めにならなければいけなかったのです。それで、祝福されるイスラエルではなく、異邦人に攻め入られて、踏みつぶされて、異邦人が支配する時代へと入っていくのです。これが、「異邦人の時」であります。ですから、もっと分かり易く言えば、「神を敬っていない世界」であります。この世が、悪魔の支配の中にある世界です。エルサレムが踏み荒らされることによって、神の住まれる神殿が壊されていることによって、確かに神の不在の世界が広がっていることを表しています。

ちなみに、エルサレムのその後の歴史はどうなったかと言いますと、**ローマ**が異教の神々をエルサレムに持ってきました。けれども、ローマ皇帝が信仰を持つに至り、その時に**ビザンチン朝**がエルサレムを支配しました。現存している、イエス様が死なれ、甦られたところを記念する教会は、その時に建てられたものです。それから、イスラムが台頭しました。それで、この地域はイスラムの勢力の下に入りました。それから、**十字軍**が聖地奪還ということで、エルサレムを支配しました。けれども、エジプト発のイスラム教の国、**マムルーク朝**が攻めてきて支配します。それから、トルコ発のイスラム教の国、**オスマン朝**がこの地域を支配します。**オスマン朝**は、ものすごい広い地域を、イランからヨーロッパ南部、アラビア半島、北アフリカまでを支配します。けれども、欧米列強の近代に入って、第一次世界大戦後、**英国**が委任統治します。けれども、第二次世界大戦後、イスラエルが建国します。ところが、肝心のエルサレムはヨルダンの支配下にありました。1967年、六日戦争で、イスラエル軍が神殿の丘に入り、そして嘆きの壁から、角笛を鳴らします。こうしてエルサレムがイスラエルの支配下に再び入りました。ところが、肝心の神殿の丘の敷地は、今もヨルダンのイスラム当局の管轄下にあります。ですから、正確には今に至るまで異邦人の時、エルサレムが踏み荒らされている時は続いているのです。

聖書によれば、神がエルサレムを回復されるのは、主イエス様が地上に戻って来られてから、神の国が立てられてから、であります。

## 2B バビロンによるエルサレム破壊 ダニエル書

今はローマの時代、イエス様が地上におられた時の話をしましたが、実はもっと前から異邦人の時は続いていました。実は、紀元前 568 年のバビロン捕囚の時がその始まりです。ユダヤ人が神に背き、偶像に仕え、忌まわしいことを行ない、不正を働いていて、神に立ち帰らなかったのも、主はバビロンを裁きの器として用いられました。バビロンがその地域一帯に攻め入るようにさせ、エルサレムを包囲せしめ、そして反抗するエルサレムの住民を滅ぼすまにされたのです。そしてユダヤ人はバビロンに捕え移されました。エルサレムは廃墟のままとなり、この時から異邦人の時が始まっていました。

## 2A 帝国から御国へ ダニエル書

そして、異邦人の時を克明に預言している旧約聖書の書物が、ダニエル書です。バビロンにもっと前、紀元前 605 年に既に捕え移されていたダニエルが、バビロンの王に仕える役職に付いていました。その時に、王ネブカデネザルの見た夢があり、また自分自身が見た幻がありました。そこにエルサレムを踏みつぶし、イスラエル人を虐げ、異邦人が支配する帝国の歴史が啓示されています。

## 1B 人の栄光の後の御国 2

ネブカデネザルは、新しいバビロン帝国を治めて第二年に、夢を見ました。それが、何であるか知るために、呪法師や呪術師などによって、夢とその解き明かしを教えよと命じます。彼らは、「夢を教えてください、そうすれば解き明かします。」と言いましたが、王は夢も伝えなければいけないと言いました。けれども、彼らは、「2:11 王のお尋ねになることは、むずかしいことです。肉なる者とその住まいを共にされない神々以外には、それを王の前に示すことのできる者はいません。」と答えます。そうです、彼らの神々は被造物の中におり、汎神論でした。しかし、それを超えていない限り、そんなことはできませんと答えました。

それで王は怒りたけりましたが、ダニエルと友人三人が祈り、そしてダニエルに夢を解き明かしが与えられたのです。それが、金属でできている人の像でした。31 節から読みましょう。

31 王さま。あなたは一つの大きな像をご覧になりました。見よ。その像は巨大で、その輝きは常ならず、それがあなたの前に立っていました。その姿は恐ろしいものでした。32 その像は、頭は純金、胸と両腕とは銀、腹とももとは青銅、33 すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。34 あなたが見ておられるうちに、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを打ち砕きました。35 そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金もみな共に碎けて、夏の麦打ち場のみがらのようになり、風がそれを吹き払って、あとかたもなくなりました。そして、その像を

打った石は大きな山となって全土に満ちました。

大事な点は三つあります。第一にこれは人の像ですが、その質が頭から下に降りて行くにしたがって少しずつ衰えていることです。最後は鉄と粘土になっています。第二に、「一つの石が人手によらずに切り出され」というところです。第三に、それが最後の鉄と粘土のところにぶち当たることです。第四に、人の像が砕けて、その石が大きな山になることです。

36 これがその夢でした。私たちはその解き明かしを王さまの前に申し上げます。37 王の王である王さま。天の神はあなたに国と権威と力と光栄とを賜い、38 また人の子ら、野の獣、空の鳥がどこに住んでいても、これをことごとく治めるようにあなたの手にもたらされました。あなたはあの金の頭です。39 あなたの後に、あなたより劣るもう一つの国が起こります。次に青銅の第三の国が起こって、全土を治めるようになります。40 第四の国は鉄のように強い国です。鉄はすべてのものを打ち砕いて粉々にするからです。その国は鉄が打ち砕くように、先の国々を粉々に打ち砕いてしまいます。

そうです、これは異邦人の時がどのようなのかを、その初めの王ネブカデネザルに示したものです。イスラエルとエルサレムを支配し、中東とその周囲全域を支配している帝国の姿であります。金の頭がバビロンです。ネブカデネザルが王となった紀元前 605 年から 539 年まで治めていました。胸と両腕はメディア・ペルシヤ帝国です。紀元前 539 年に、バビロンの王ベルシャツアルが宴会を開いてきた時に、メディア・ペルシヤ連合軍が入り、その都を陥落させました。そして、青銅の腹と太ももは、ギリシヤ帝国です。紀元前 330 年から 146 年まで続きます。ローマが次にやってきますが、それが鉄の足です。ローマ帝国となるのは紀元前 27 年です。そして、途中でローマが分裂して西は紀元後 476 年まで、東が 1453 年まで続きます。

そして大事なのは、イエス様がこの時にお生まれになっていることです。イエス様は、ご自分のことを先の、人手によらず切り出された「一つの石」とされたのです。十字架に付けられる最後の週に、ユダヤ人指導者に言われました。「ルカ 20:17-18 イエスは、彼らを見つめて言われた。「では、『家を建てる者たちの見捨てた石、それが礎の石となった。』と書いてあるのは、何のことでしょう。この石の上に落ちれば、だれでも粉々に砕け、またこの石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛び散らしてしまうのです。」イエス様は、人手ではない方、マリヤは処女で聖霊によってイエス様を身ごもりました。そして、この方は家を建てる者たちの捨てた石とされます。つまり、ユダヤ人宗教指導者から見捨てられ、十字架に付けられます。けれども、主は復活し、昇天され、そして再び来られます。その時は、打ち砕く石となることを予告しておられるのです。

41 あなたがご覧になった足と足の指は、その一部が陶器師の粘土、一部が鉄でしたが、それは分裂した国のことです。その国には鉄の強さがあるでしょうが、あなたがご覧になったように、その鉄はどろどろの粘土と混じり合っているのです。42 その足の指が一部は鉄、一部は粘土であっ

たように、その国は一部は強く、一部はもろいでしょう。43 鉄とどろどろの粘土が混じり合っているのをあなたをご覧になったように、それらは人間の種によって、互いに混じり合うでしょう。しかし鉄が粘土と混じり合わないように、それらが互いに団結することはありません。

ここからが、私たちが直接かかわってくる時代に入ります。「分裂した国」と言います。かつてのローマ帝国は西と東に分裂しました(364 年)。そしてそれぞれが滅びましたが、しかし中東とその周辺に対して影響力を及ぼし続けます。西は崩壊しても西欧においてその力は保っています。フランスでは 800 年に、自らの支配権を「フランス・聖ローマ帝国」と呼びました。同じようにドイツは、指導者らが自分への称号を「カエザル」と付けました。そして東ローマですが、ビザンチン朝の時は中東全域に力を及ぼし、それからロシアは東ローマの残骸がはっきりと見て取れました。「ツァー」 という称号が皇帝に付けられましたが、それはカイザルのことです。

そして近代になって、それが「欧米列強」という形で表れます。近代の前にスペインが強くなり、世界に植民地を作っていました。そして近代になり欧米が世界に精力を伸ばし、ロシアも同じです。私たちアジアにもその勢いが及び、1853年に江戸時代の時に黒船が来て、1868年に明治維新で、そして今の日本があります。

そして中東地域に目を戻しましょう。先に話していましたように、中世から近代までそこは、トルコから出たイスラム教の国オスマン朝が全域を治めていました。そこに英国、仏国、そして露西亜が勢力を拡大します。そして第一次世界大戦で戦い、イスラエルと周辺地域だけでなく、エジプト、イラク、イランの広域を、つまりオスマン帝国の領域を分割しました。そしてイスラエルのところは、イギリスが委任統治を始めたのです。まさに、ここに書いてある「それらは人間の種によって、互いに混じり合うでしょう。しかし鉄が粘土と混じり合わないように、それらが互いに団結することはありません。」とあるとおりなのです。

そしてちょうどこの時期に、世界に散らされていたユダヤ人たちが少しずつ戻ってきます。初めは東欧とロシアからでした。イエス様が、産みの苦しみの始まりとして、「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり(マタイ 24:7)」と言われましたが、第一次世界大戦が起こりました。それで、オスマン朝が倒れて英国がそこを、委任統治します。そして、英国の外務大臣バルフォアが、ユダヤがその地を民族郷土として与えるという書簡を送りました。そして第二次世界大戦が起こりました。ユダヤ人はホロコーストを経験します。そして戦後、1947年11月29日、国連決議でユダヤ人の国とアラブ人の国の分割案が決議されました。そして1948年5月14日にイスラエルが建国されるのです。

この足と足の指の時代に、そしてイエス様の言われた産みの苦しみの始まりの時に、ユダヤ人が帰還して、さらにイスラエルを建国したということ自体が、ますます異邦人の国が終わりに近づきつつあるのではなか、という期待が生まれているのです。

ところで、かつてのローマ帝国があった地域は今、どうなっているかと言いますと、これが混乱と対立を繰り返しています。欧米列強や露西亜によって、かつてのオスマン朝を分割しました。東はイラン、そしてイラク、シリア、レバノン、ヨルダン、そしてイスラエルがあります。そしてオスマンの発祥地であるトルコが存在します。南にはサウジアラビアがあり、エジプトもあります。またリビアもあり、隣はチュニジアです。これらの多くが、あまりにも人工的に作った秩序であり、百年間、それぞれの強権的な支配者がそこを治めていました。

しかし、米国や西欧の影響力が失われつつあります。ついに、アラブの春が 2010 年から中東全域で起こりました。そしてそれぞれの国にイスラム原理主義が台頭して、内戦状態にあるところには、イスラム国がはびこることになりました。そしてイスラム国が狙っている領土というのは、結局のところ、かつての諸帝国が支配していたところを支配したいのです。そして興味深いことに、イスラエルの周囲の国々は基本的に、イスラエルが生存してほしいと思っています。かつては、中東戦争でイスラエルと戦いました。そして今も、隙あらば攻撃してイスラエルを消滅させたいと願っています。

私たちが日本の国に生きていて、この地域で起こっていることが無縁ではない、いや、密接に結びついているということは、私が力説するまでもなく、肌身で感じ取れると思います。石油は、まさにイランと湾岸諸国間のホルムズ海峡を通過して、かなりの割合で来ています。イスラムの国イランは、その海峡を封鎖するような脅しをかけているわけです。それで、去年は、その情勢も取り扱った安保法制が国会で長いこと議論されて、多くの人が国会前でもデモをしていたというつながりがあります。このように、異邦人の時は進行しており、これからどうなるか？ということでもあります。

44 この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国は他の民に渡されず、かえってこれらの国々をことごとく打ち砕いて、絶滅してしまいます。しかし、この国は永遠に立ち続けます。45 あなたがご覧になったとおり、一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と青銅と粘土と銀と金を打ち砕いたのは、大いなる神が、これから後に起こることを王に知らされたのです。その夢は正夢で、その解き明かしも確かです。」

神の言葉を信じている者たちにとって、ここが注目点です。「この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。」であります。神を敬わないこの世に対して、神は永遠の国を立てられます。これらの国々をことごとくイエス様は打ち砕かれます。ヨハネも黙示録でこの姿を幻で見ました。「黙示 19:15-16 この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。その着物にも、ももにも、「王の王、主の主。」という名が書かれていた。」そして大いなる山になりますが、その山は王の権威と力、支配を表しています。それが全世界に広がるのです。キリストが再臨されて、神の国が立てられるのです。

## 2B 獰猛な獣 7

そして次に、同じ異邦人の時をダニエル自身が見た幻に注目しましょう。

1 バビロンの王ベルシャツアルの元年に、ダニエルは寝床で、一つの夢、頭に浮かんだ幻を見て、その夢を書きしるし、そのあらましを語った。

時はおそらく紀元前 553 年です。バビロンの最後の王ベルシャツアルが王となった元年に見た夢です。彼は身勝手な王であり、いったいこれからバビロンはどうなるのだろうか？という不安をダニエル自身が持っていたかもしれません。そこで、神は彼に夢をお与えになりました。

2 ダニエルは言った。「私が夜、幻を見ていると、突然、天の四方の風が大海をかき立て、3 四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。4 第一のものは獅子のようで、鷲の翼をつけていた。見ていると、その翼は抜き取られ、地から起こされ、人間のように二本の足で立たされて、人間の心が与えられた。5 また突然、熊に似たほかの第二の獣が現われた。その獣は横ざまに寝ていて、その口のきばの間には三本の肋骨があった。するとそれに、『起き上がって、多くの肉を食らえ。』との声がかかった。6 この後、見ていると、また突然、ひょうのようなほかの獣が現われた。その背には四つの鳥の翼があり、その獣には四つの頭があった。そしてそれに主権が与えられた。7 その後また、私が夜の幻を見ていると、突然、第四の獣が現われた。それは恐ろしく、ものすごく、非常に強くて、大きな鉄のきばを持っており、食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。これは前に現われたすべての獣と異なり、十本の角を持っていた。

これらは、ネブカデネザルの見た人の像の夢に匹敵します。バビロンが金の頭であります。ここでは獅子のような獣です。メディア・ペルシヤは銀の胸と両腕でしたが、ここでは肉を食らう熊のような獣です。そしてギリシヤは青銅の下腹と太ももでしたが、ここでは四つの翼と四つの頭を持つ豹です。そして、ローマは鉄のすねと足でしたが、ここでは得体の知れない、自然界には存在しない鉄のきばを持つ獣として登場します。

つまり、こういうことができます。同じ国々をネブカデネザルもダニエルも夢の中で見たのですが、まったく違う姿であったということです。光り輝く貴金属をネブカデネザルは見ましたが、獰猛な獣をダニエルは見ました。ネブカデネザルは異教徒であり、人間の国の王です。人間が、神を信じない人がこの世を見るとき、そこには栄華があり繁栄があります。けれども、神の人であるダニエルがこの世を見るとき、それは横暴で、荒れ狂う獣なのです。人が見れば栄光に輝いていても、神が見れば横暴であります。私たち神に捕えられた者たちは、その栄光の姿に惑わされることなく、人によってこの地が踏みにじられているという見方をしないといけませんね。

ここにいる獣どもは、一つ一つの帝国の特徴をよく表しています。鷲の翼のある獅子がバビロン

ですが、人間のように立っています。これはダニエル書 4 章、ネブカデネザルが野の獣と住むようになったけれども、七つの時が過ぎてから理性が戻ってきた姿です。そして熊のような獣は、横ざまに寝ていますが、それがまさにメディアとペルシヤの国土を表しているような形になっています。そしてギリシヤが、豹であり、四つの頭を持っています。アレキサンダー大王がものすごい速度で、世界を制覇します。しかし 30 歳そこそこで夭折し、その後、国が四つに分割されました。そして第四の獣ですが、鉄の牙が特徴ですね。国々をかみ砕くように武力によってローマは伸長しました。ギリシヤの場合、アレキサンダーは征服しても、その被征服民を虐げることはありませんでした。もし蹂躪していたら、あれだけすばやく進出できなかったでしょう。けれどもローマは違います。征服した国々と民の文明を破壊して、粉々にし、捕虜を何千人も殺し、また奴隷として十数万人売りしました。

そして第四の獣に非常に特徴的なのは「十本の角」です。ネブカデネザルの見た夢の「足の指」に相当します。(足の指はもちろん十本ですね。)そして次の「小さな角」は、2章の夢にはない新しい啓示です。

8 私がその角を注意して見ていると、その間から、もう一本の小さな角が出て来たが、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。よく見ると、この角には、人間の目のような目があり、大きなことを語る口があった。9 私が見ていると、幾つかの御座が備えられ、年を経た方が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりけのない羊の毛のようであった。御座は火の炎、その車輪は燃える火で、10 火の流れがこの方の前から流れ出ていた。幾千のものがこの方に仕え、幾万のものがその前に立っていた。さばく方が座に着き、幾つかの文書が開かれた。11 私は、あの角が語る大きなことばの声がするので、見ていると、そのとき、その獣は殺され、からだはそこなわれて、燃える火に投げ込まれるのを見た。12 残りの獣は、主権を奪われたが、いのちはその時と季節まで延ばされた。13 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。14 この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。

私たちはネブカデネザルの幻では、足と足の指のところに、石がやって来て打ち砕いて、そして大きな山となったというものでしたが、ダニエルはその部分を今の幻によってみました。9 節には、神の御座におられる神ご自身の幻です。そして、神が最後の獣を殺し、燃える火の中に投げ込まれます。そして 13 節で、「人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。」とあります。そうです、イエス様ご自身です。大祭司カヤパに対して何と言われたかを思い出せますか？ご自身が神の御子キリストであることをはっきりと言われ、「マタイ 26:64 あなたの言うとおりに。なお、あなたがたに言うておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。」と言われています。そして 14 節に、キリストに神の国が任される姿が書かれています。



ところが、その前に十本の角の間から小さな角が出てくる、というものです。これが、初めの三本を引き抜くようにして、それから人間の目のような目、つまりすぐれた知性が与えられます。しかし、神ではなく人間の目なので、極めて人間主義的な見方をする人物です。それから、大きなことを語る口です。つまり巧みな口と大言壮語です。さすがのダニエルも、この幻には驚き、特に第四の獣について知りたがっています。

15 私、ダニエルの心は、私のうちで悩み、頭に浮かんだ幻は、私を脅かした。16 私は、かたわらに立つ者のひとりに近づき、このことのすべてについて、彼に願って確かめようとした。すると彼は、私に答え、そのことの解き明かしを知らせてくれた。17 『これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。18 しかし、いと高き方の聖徒たちが、国を受け継ぎ、永遠に、その国を保って世々限りなく続く。』19 それから私は、第四の獣について確かめたいと思った。それは、ほかのすべての獣と異なっていて、非常に恐ろしく、きばは鉄、爪は青銅であって、食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。20 その頭には十本の角があり、もう一本の角が出て来て、そのために三本の角が倒れた。その角には目があり、大きなことを語る口があった。その角はほかの角よりも大きく見えた。21 私が見ていると、その角は、聖徒たちに戦いをいどんで、彼らに打ち勝った。22 しかし、それは年を経た方が来られるまでのことであって、いと高き方の聖徒たちのために、さばきが行なわれ、聖徒たちが国を受け継ぐ時が来た。

ダニエルのかたわらにいた御使いは、ダニエルが悟ることができず困惑していた、その角について答える前に、「聖徒たちが神の国を受け継ぐ」という約束を強調しています。そうですね、神の国については、それが到来するだけでなく、御国を神の所有の民とされた者たちが受け継ぐということを知ることは大切です。主はアダムに、「地を支配せよ」と命じられました。神の似姿に造られた人間は、神に自分がつながっていることによって、神のものを管理し、支配します。罪を犯したことによって、その力を失ってしまいましたが、神は、神の形を私たちのうちに回復させようとしています。新約聖書の約束で、「相続する」という約束は多いですね。イエス様は柔和な者は、地を相続すると言われました。へりくだる者こそが、主から多くを任せられます。そして、エペソ書には、「天にあるもの地にあるもの、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることになるのです。このキリストにあって、私たちは彼にあって御国を受け継ぐ者ともなったのです。(1:10-11)」とあります。

しかし、「聖徒たち」という中には、さまざまな時代に、さまざまな方法で神のものとされる者たちがいます。ここで、この角が聖徒たちに「打ち勝った」という言葉があるからです。イエス様はペテロに教会の約束を与え、「ハデスの門もそれには打ち勝てません。(マタイ 16:18)」と言われました。教会の人々も聖徒ですが、ここでは私たちのことを話しているのではありません。黙示録には、教会が天に引き上げられて、患難時代に入っても、その後で神のことばを信じて、イエス様によって救われる人々の存在があります。黙示 20 章に、こう書いてあります。「また私は、イエスのあか

しと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。(4 節)」とあります。患難期には、神と人との間で今の恵みの時代と多少異なる、神の取り扱いがあります。

またイスラエルの残りの者たちも、この中の聖徒でありましょう。彼らも大患難によって苦難を味わいますが、けれども終わりには救われる約束が与えられています。

23 彼はこう言った。『第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。24 十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らのあとに、もうひとりの王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。25 彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にはゆだねられる。26 しかし、さばきが行なわれ、彼の主権は奪われて、彼は永久に絶やされ、滅ぼされる。27 国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。』28 ここでこの話は終わる。私、ダニエルは、ひどくおびえ、顔色が変わった。しかし、私はこのことを心に留めていた。」

ここに、ダニエル書 2 章の足と足の指の状態で何が起こるかを見ます。キリストが来られる前に、この小さな角が出てくるということを知る必要があります。それが反キリストです。

「全土を食い尽くし、踏みつけ、かみ砕く」とあるとおりです。これからは世界統一化が進みます。今、私たちが世界の裏側で起こっていることがそのまま私たちの生活に結びついている状況になりました。そして、十本の角とは十人の王のことです。世界が何らかの形で十の連合体になります。それが、EU はその一つの動きです。中東地域ではアラブ連盟があります。そして世界では、経済ブロック化が行なわれています。G10 のような西側の十の国、私たち日本も含まれますが、十カ国がすでに世界経済を担っています。これから、世界統一政府が出てくる素地が敷かれていくでしょう。そして、その中で反キリストが彗星のごとく現れます。初めは小さい指導者ですが、言葉が巧みで、どんどん力を持ち、ついに三人の支配者の分を自分のものとします。それから、残る七人が彼に全権委任をします。それで世界総統となります。

彼は、時と法則を変えようとしている、今までの秩序を根底から変えようとします。今の同性婚への流れは、その典型的な例でしょう。そして、大きな口、冒涇が特徴となります。神なるものに対して強い反発をします。今の人間中心主義、ヒューマニズムはまさにそれです。そして聖徒への迫害を行ないます。その期間は、「ひと時とふた時と半時」です。時は一年として、三年半であります。そしてこの期間が、ダニエル書で最後の第七十週目の七年間の後半部分であることが分かります。それから黙示録では、42 か月という数字としても現れます。患難期七年の後半の時、その時、

地上にいる聖徒やイスラエルの残された者は最も大きな試練を受けます。聖徒たちは、殉教するしか方法はなくなります。

しかし、この幻はその暗い部分が中心部分ではありません。イエス様が来られて、この獣を滅ぼし、ご自分が主権を持ち、聖徒たちに御国を受け継がせるという希望が中心であります。ちなみに、教会は、患難期はすでに天におり、キリストと共に栄光の内に現れます。そして、地上で神の国を同じように受け継ぎます。

### 3B 荒らす忌むべき者 8, 9

そしてダニエル書8章と9章において、この人物が、「荒らす忌むべき者」として登場します。8章においては、ギリシヤ帝国から現われる王「アンティオコス・エピファネス」に注目がいきます。8章は、メディア・ペルシヤ帝国が雄羊として現われ、次に雄山羊としてギリシヤ帝国が現れます。それから、雄山羊の角アレキサンダー大王が現れますが、折れて四つの角が生え出ます。これが四分割された国です。その中の角から、さらに小さな角が出てきます。これは四分割の国の一つ、セレウコス朝からアンティオコス・エピファネスが出てくることを示します。

そして彼は、狡猾で、権力を口によって自分のものとしていき、自分に力を持たせた後で、やりたい放題暴れます。そしてイスラエルの民に対して、敢えて罪を犯させます。ユダヤ教の信仰を持っている者に大迫害を加えます。ギリシヤ人の異教を強制させました。神殿には、豚を祭壇にささげさせ、ゼウス神を建てました。これを、「荒らす忌むべきもの」と呼んでいます。そこで、ユダヤ人の主に自分を捧げる者たちが立ちあがって、有名な、「マカバイ記」の戦いを展開し、神殿が汚されてから 2300 日後に、清めることができました。それを記念してハヌカーと言います。ここで大事なものは、アンティオコス・エピファネスが、後に来る小さな角、最後の復興するローマ、十の角を持っているローマから出てくる反キリストを予め示しているということです。

23 彼らの治世の終わりに、彼らのそむきが窮まるとき、横柄で狡猾なひとりの王が立つ。24 彼の力は強くなるが、彼自身の力によるのではない。彼は、あきれ果てるような破壊を行ない、事をなして成功し、有力者たちと聖徒の民を滅ぼす。25 彼は悪巧みによって欺きをその手で成功させ、心は高ぶり、不意に多くの人を滅ぼし、君の君に向かって立ち上がる。しかし、人手によらずに、彼は碎かれる。

この箇所はアンティオコス・エピファネスのことを預言したものなのですが、「君の君に向かって立ち上がる」とまで書かれています。これはキリストご自身ですね。彼はそこまでしたことは、歴史の記録に残っていません。つまり、これは反キリストを指し示しているのです。つまり、霊はすでに働いていて、アンティオコス・エピファネスを動かしていたのですが、それは反キリストの霊であったということです。終わりの日にはアンティオコス自身が出現する、ということです。

ここは預言の難しさでありましょう。イザヤ書にも、エゼキエル書にも、王に働いている背後の悪魔の存在をえぐり出しています。例えば、イザヤ書 14 章はバビロンの王に対しての預言なのですが、到底、人間のバビロン王に当てはめることのできない表現が現れます。「14:12-15 暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」これは、明らかにバビロンの王ではなく、明けの明星、ルシファーであり、悪魔本人であることが分かります。バビロンの王を動かしていた悪魔がおり、そしてその悪魔自身に対して神が裁きの言葉を語られる、ということです。このような形で、8 章は描かれています。

そして 9 章は、まさに終わりの日の荒らす忌むべき者の姿を御使いガブリエルがダニエルに与えます。

24 あなたの民とあなたの聖なる都については、七十週が定められている。それは、そむきをやめさせ、罪を終わらせ、咎を贖い、永遠の義をもたらし、幻と預言とを確証し、至聖所に油をそそぐためである。25 それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。26 その六十二週の後、油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない。やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する。その終わりには洪水が起こり、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」

ダニエルは、エルサレムに帰還する日が近づいたのを知って、悔い改めの祈りを捧げ、神がエルサレムとその神殿を顧みてくださるよう祈っていました。すると答えが与えられ、「あなたの民とあなたの聖なる都については、七十週が定められている。」とのことなのです。そして、「引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令」が起点となって、七週と六十二週、その後でメシヤが断たれます。493 年後に、確かにイエス様は十字架に付けられました。それから、「やがて来たるべき君主の民」というのは、反キリストの出てくる民ですから、ローマ人です。紀元 70 年にエルサレムを破壊しました。そして、荒廃が定められていますが、「洪水」といのはここにあるように、軍隊の戦いのことです。

それから、君主がユダヤの民と契約を結ぶのです。その契約は神殿についてのことであり、神殿が再建してくれるというものです。今のエルサレムで、神殿の丘に神殿を再建しようという強い動きがあります。そしてそれが可能となって、三年半後に、反キリスト、荒らす憎むべき者は、いけにえをやめさせるのです。そのことをイエス様は、ダニエル書に書かれている事を悟りなさいという

マタイの注意書き付きで、ユダヤ人にとっての大きな患難が来ることを前もって警告しておられました。「マタイ 24:15-21 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。だが、その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。」

ですから、今、イスラエルの国が建てられており、ユダヤ人がたくさん帰還して、エルサレムにも住んでいますが、彼らが反キリストによる試練を受けることになります。その試練の最後に、イエス様が現われて、彼らを救ってくださるというシナリオになるのです。その時に、異邦人の時が終わるのです。

#### 4B 大いなる戦い 10-12

そして 10 章から 12 章には、終わりの日における大いなる戦、すなわちしばしばハルマゲドンの戦いと呼ばれる、その幻が啓示されています。初めは、大いなる戦の後ろで戦っている天使たちの姿が出てきます。ペルシヤの背後にも大きな墮落した天使がいたし、ギリシヤの背後にもいます。そして、ダニエルにはイエス様がご本人と思われる神からの使いが近づいておられます。そしてイスラエルには、天使長ミカエルがついて戦うのです。

11 章には、ギリシヤの四分割された国の二つの国の間での戦いから始まります。北にあるセレウコス朝と、南にあるプトレマイオス朝の歴代の王の戦いが語られています。そして、その中でアンティオコス・エピファネスも登場します。その狡猾さと卑劣さはとんでもないです。ところが、11 章 36 節から、8 章と同じように反キリスト本人の活動そのものが預言されます。

36 この王は、思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高め、大いなるものとし、神の神に向かってあきれ果てるようなことを語り、憤りが終わるまで栄える。定められていることが、なされるからである。37 彼は、先祖の神々を心にかけず、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかけない。すべてにまさって自分を大きいものとするからだ。38 その代わりに、彼はとりでの神をあがめ、金、銀、宝石、宝物で、彼の先祖たちの知らなかった神をあがめる。39 彼は外国の神の助けによって、城壁のあるとりでを取り、彼が認める者には、栄誉を増し加え、多くのものを治めさせ、代価として国土を分け与える。40 終わりの時に、南の王が彼と戦いを交える。北の王は戦車、騎兵、および大船団を率いて、彼を襲撃し、国々に侵入し、押し流して越えて行く。

反キリストが終わりの日に行なうことです。世界政府の総統として君臨します。彼の特徴が自分を神にすること、神なるものに心にかけない、冒瀆するということです。

41 彼は麗しい国に攻め入り、多くの国々が倒れる。しかし、エドムとモアブ、またアモン人のおもだった人々は、彼の手から逃げる。42 彼は国々に手を伸ばし、エジプトの国ものがれることはない。43 彼は金銀の秘蔵物と、エジプトのすべての宝物を手に入れ、ルブ人とクシュ人が彼につき従う。44 しかし、東と北からの知らせが彼を脅かす。彼は、多くの者を絶滅しようとして、激しく怒って出て行く。45 彼は、海と聖なる麗しい山との間に、本営の天幕を張る。しかし、ついに彼の終わりが来て、彼を助ける者はひとりもない。

「麗しい国」とはイスラエルのことであり、その中で、また周囲で反キリストが暴れます。これがハルマゲドンの戦いです。しかし、終わりが来ると言っているのです。

12:1 その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしている者はすべて救われる。2 地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。3 思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。4 ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと探り回ろう。」

黙示録 12 章にも、イスラエルのためにミカエルが悪魔と戦う場面がでてきますが、立ち上がるのです。それでイスラエルにとって最も苦難の時が来ますが、残りの民は救われます。そして、既に神を望んで死んで行ったイスラエル人はこの時に甦ります。そして報いを受けるのです。

さて、ダニエルはこのことがさっぱり悟ることができませんでした。事実、主の使いは、「あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。」と言われるのです。ところが、これを開かれたのは、イエス様ご自身です。イエス様は弟子たちに対して言われました。「マタイ 13:16-17 しかし、あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。まことに、あなたがたに告げます。多くの預言者や義人たちが、あなたがたの見ているものを見たいと、切に願ったのに見られず、あなたがたの聞いていることを聞きたいと、切に願ったのに聞けなかったのです。」何でもない普通の弟子たちが、ダニエルでさえ悟ることのできなかった奥義を今、イエス様がおられるということで明らかにしていただいています。これは私たちも同じなのです。次に、新約聖書における異邦人の時をじっくり見てみたいと思います。

### 3A 裁かれる獣 黙示録

私たちは、ダニエル書から異邦人の時について、主の定められた七十週が大きな枠組みを作っている事を学びました。そこで黙示録から眺めてみたいと思います。黙示録は、イエス様がヨハネに語られた、「あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書き記せ。(1:19)」と言われたように、三つの区分があります。1章がヨハネの見た事で、2章と3章、七つの教会が今ある事です。私たちはまだ「今ある事」の中に生きています。教会があるからです。そして4章において、「この後に起こる事」すなわち、教会の後の事であります。これから先のことです。そして4章と5章においては、天の情景があります。4章において父なる神をあげ、また5章でキリストがあげられています、そこに教会の姿が出てきます。キリストの血によって贖われた人々の姿です。

そして6章からが、ダニエル書 9 章の第七十週の始まりになります。小羊が父なる神から受け取った巻き物の封印を一つずつ解いていかれますが、初めに出てくるのが白い馬に乗った者です。これが、19 章の白い馬に乗ったキリストご自身の摩り替え、反キリストです。そして第七の封印が解かれると 8 章において七つのラツパが始まります。そして第五のラツパが吹き鳴らされた後に、10 章から強い大きな御使いが、開かれた巻き物をもって大声で叫ぶのです。「神の奥義は、神がご自分のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。(10:7)」と告げた通りに、これまで預言者が語って来たことの中核部分が、これから開かされていくこととなります。それが、半週の部分です。第七十週の半ばを境に何が起こるかについて、詳しく述べている部分であります。

11 章においては、神殿が反キリストの者になってしまっていることに対して、前半の三年半、1490 日の間、預言をする二人の証人が出てきます。そして 7 節を見ると、「そして彼らがあかしを終え、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。」とあります。これがダニエル 7 章の第四の獣、反キリストです。獣が生き返ったように出てきて、戦って彼らに打ち勝ちます。そしてこれで第六のラツパが終わります。そして第七のラツパが吹き鳴らされます。

### 1B 竜と獣の国 12-13

12:1 また、巨大なしるしが天に現われた。ひとりの女が太陽を着て、月を足の下に踏み、頭には十二の星の冠をかぶっていた。2 この女は、みごもっていたが、産みの苦しみと痛みのために、叫び声をあげた。3 また、別のしるしが天に現われた。見よ。大きな赤い竜である。七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。4 その尾は、天の星の三分の一を引き寄せると、それらを地上に投げた。また、竜は子を産もうとしている女の前に立っていた。彼女が子を産んだとき、その子を食い尽くすためであった。5 女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもって、すべての国々の民を牧するはずである。その子は神のみもと、その御座に引き上げられた。6 女は荒野に逃げた。そこには、千二百六十日の間彼女を養うために、神によって備えられた場所があった。

この女は、イスラエルです。1 節は、ヨセフがかつて見た夢に出てくるヤコブの家族の姿ですから

イスラエルです。そして、女が男の子を身ごもります。これがまさしくキリストご自身です。しかし、その男の子を殺そうとする竜が出てきます。この竜は、悪魔、サタンです。そして見てください、3節に「七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。」とあります。これが獣であり、反キリストなのですが13章に詳しく出てきます。そして、女が男の子を産んでから、キリストは後に鉄の杖で国々を牧するのですが、これがまさに神の国での統治であります。このことを行なわれるのですが、その前にキリストは御座に引き上げられました。

昇天された後にイスラエルがどのようなようになるのかを6節で説明されています。「女は荒野に逃げた。そこには、千二百六十日の間彼女を養うために、神によって備えられた場所があった。」とありますね。1260日、すなわち三年半です。イエス様が、「荒らす憎むべき者が聖なる所に立つのを見たならば、ユダにいる人々は山々に逃げなさい。」と言われたその出来事です。ですから5節と6節には、大きな時間の開きがあります。

そして7節から12節までに、ダニエル書10章に書かれている、イスラエルの君ミカエルと、悪魔との戦いが書いてあります。そして悪魔が地上に投げ落とされます。それで悪魔が自分の時が短いことを知って、最後にあがくのです。それが七十週目の後半の三年半になるのです。イスラエルがどのようなようになるかを見てください。

13 自分が地上に投げ落とされたのを知った竜は、男の子を産んだ女を追いかけた。14 しかし、女は大わしの翼を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであった。15 ところが、蛇はその口から水を川のように女のうしろへ吐き出し、彼女を大水で押し流そうとした。16 しかし、地は女を助け、その口を開いて、竜が口から吐き出した川を飲み干した。17 すると、竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たちと戦おうとして出て行った。18 そして、彼は海への砂の上に立った。

イスラエルの残りの民は、荒野に逃げます。また、イエス様によると山々に逃げます。これは、旧約聖書によるとボツラと呼ばれる、エドムの首都でした。そこは岩山に囲まれたところであり、今はペトラと呼ばれています。地形的に、軍隊がそこには入ることがかなり難しいです。そして悪魔は、イスラエルに信仰によって連なっている者たち、神の戒めを守って、イエス様の証しを保っている聖徒全般に戦いを挑みますが、午前中話しましたように、教会が携挙された後にイエス様を信じる聖徒たちのことです。

1 また私は見た。海から一匹の獣が上って来た。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があった。2 私の見たその獣は、ひょうに似ており、足は熊の足のようで、口はししの口のようであった。竜はこの獣に、自分の力と位と大きな権威とを与えた。



ここに、獣が出てきます。しかし、ダニエル書の第四の獣と若干異なります。十本の角はその通りですが、七つの頭があります。そして、獣は第四の獣だけでなく、豹の姿もあり、熊の足、口が獅子のようであるとのこと。ですから、これまでのエルサレムを踏みつけた諸帝国の集合体のようにして描かれています。その究極に反キリストがいるのです。そして、反キリストがなぜ、先に底知れぬ所から上がってくるのができたのかと言いますと、背後に悪魔がいたからです。彼が力と位と大きな権威を与えます。

3 その頭のうちの一つは打ち殺されたかと思われたが、その致命的な傷も直ってしまった。そこで、全地は驚いて、その獣に従い、4 そして、竜を拝んだ。獣に権威を与えたのが竜だからである。また彼らは獣をも拝んで、「だれがこの獣に比べられよう。だれがこれと戦うことができよう。」と言った。5 この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する権威を与えられた。6 そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。

異邦人の時の最後の姿は、云わば「神の国のパロディ版」であります。到来する神の国の前に、悪魔が偽物を人々に提供するということです。父なる神が御子に力を位、権威を与えられ、死者の中から甦らせたように、竜が獣に権威、位、力を与え、死んだように見えたけれども生き返ったように見せかけ、人々が獣を拝み、それによって悪魔を拝むように仕向けます。そして、ここにあるように、反キリストは大きな口を持っており、神や天に住む者をひどく憎み、罵ります。

7 彼はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。8 地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされていない者はみな、彼を拝むようになる。9 耳のある者は聞きなさい。10 とりこになるべき者は、とりこにされて行く。剣で殺す者は、自分も剣で殺されなければならない。ここに聖徒の忍耐と信仰がある。

ここがダニエル書 7 章にあった、「聖徒たちに打ち勝つ」話であります。

11 また、私は見た。もう一匹の獣が地から上って来た。それには小羊のような二本の角があり、竜のようにものを言った。12 この獣は、最初の獣が持っているすべての権威をその獣の前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拝ませた。13 また、人々の前で、火を天から地に降らせるような大きなしるしを行なった。14 また、あの獣の前で行なうことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらも生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。

「もう一匹の獣」が出てきました。先ほどの獣は海から出てきましたが、これは「地」から出ていま

す。彼は「小羊のような二本の角」があると書かれています。小羊と言え、思い出すが、再びイエス・キリストです。この方がほふられたと見える小羊として、黙示録5章で登場されていました。そして、「竜のようにものを言った」とあります。悪魔からの言葉、預言を語ります。

反キリストは、悪魔から権威と力と位が与えられたため、人々は悪魔を拝みましたが、ここでは、偽預言者なる獣が、反キリストを拝ませるように導きます。ここに、「偽の三位一体」を見ます。父なる神の権威と位と力が子に委託され、子の栄光を聖霊が現わすように、ここでは反キリストが悪魔の力を委託され、偽預言者が反キリストに人々を仕向けます。聖霊は、「もうひとりの助け主」と呼ばれ、イエスさまと属性は同じですが、主が天に座しておられる間、私たちのそばにいて助けてくださる方です。この方は、イエス・キリストを証して、イエスの栄光を現わします。偽預言者が、ちょうど聖霊のような働きを、偽の働きを行ないます。

イエス様が、オリーブ山にて世の終わりの時に、「荒らす憎むべき者が聖なる所に立つ」と言われた時に、このことを行なうのです。反キリストは自分こそが神であるとし、その聖所に像を作り、それを拝まないと殺されます。獣の国では、これまでにあった全ての偶像礼拝、皇帝礼拝以上の崇拜を強要するのです。

16 また、小さい者にも、大きい者にも、富んでいる者にも、貧しい者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々にその右の手かその額かに、刻印を受けさせた。17 また、その刻印、すなわち、あの獣の名、またはその名の数字を持っている者以外は、だれも、買うことも、売ることもできないようにした。18 ここに知恵がある。思慮ある者はその獣の数字を数えなさい。その数字は人間をさしているからである。その数字は六百六十六である。

政治的な迫害をするだけでなく、経済的な迫害をします。「七」という数字が完全を意味しており、神の数字であるということを経験しましたが、ここでは人間の数字「六」が出てきます。獣の国は人間のもの、地上のもの、そして悪魔に属するものです。そして、「六百六十六」という数字ですが、これはいったい何を意味しているのでしょうか？最も妥当な解釈は、「名前」です。「獣の名」とありますから、名前が印として押されると思われます。ギリシヤ語にも、ヘブル語にも、それぞれのアルファベットに数字があてがわれています。名前のアルファベットに対応する数字を足し算した合計が「六百六十六」となるという解釈です。これによると例えばイエスさまは、ヘブル語では七百四十九になります。反キリストの名前が六百六十六である可能性があります。

ですから、すべての人に、額か右手にコンピューター・チップでも埋め込まれるのでしょうか、刻印が押され、その刻印にしたがって経済活動を行なうのですから、現在進行している、バーコードによるレジ、現金ではなくクレジットカードによる売買、人間の皮膚に埋め込めることができるチップなど、ここに書かれているようなことが可能にする状況になりつつあります。

ですから、これが異邦人の国の行き着くところです。今、私たちは鉄と粘土のなかなか混じり合わない世界に生きています。けれども、そこから十の連合体のようなまとまりになります。そして、それは全体的にイスラエルに圧力をかけたような状態になります。ところが、ある人物が現れます。彼が神殿についてユダヤ人と契約を結んで、それで神殿が立てられます。三つの連合体を自分のものとして、そして自ら甦ったように見せかけて、悪魔の力を得て、人々が彼をあがめ、それで七つの連合体は彼に主権を委譲、このことによって完全な独裁主義、反キリスト体制になります。そして 14 章からこの獣の国に対する神の裁きの希望が書かれています。15-16 章で、獣の国に対する裁きが書かれています。同時に新たに、「バビロン」への裁きが書かれています。これまでの歴史の中でのバビロン、国としてのバビロンではなく、「秘儀」として語られているバビロンです。そして 17-18 章にその正体が現れます。17 章に飛びましょう。

## 2B 上に乗る女 17

1 また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「ここに来なさい。大水の上ですわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。2 地の王たちは、この女と不品行を行ない、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。」3 それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。4 この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手を持っていた。5 その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン。」という名であった。6 そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見たとき、非常に驚いた。

13 章に出てきた、七つの頭、十の角を持っている獣がいます。しかし、獣は大淫婦を載せています。これまで異邦人の時について話している時に、これまで政治的な面で、エルサレムが異邦人によって踏み荒らされている、異邦人が支配している姿を見ていきました。しかしここでは、異邦人の時の宗教の姿を示しています。

一つにこれは世界中に影響を与えています。15 節に大水とはあらゆる民族、国語、国民、群衆であるとあります。そして地の王たちが関わっていますが、なので、獣の上に女が乗っているのでしょう。そして、紫の衣は国々の上に女王のように力を持っている状態です。そして、金銀は巨額の富を蓄積しています。そして、王たちと不品行でいっぱいではありますが、これは文字通りというよりも霊的な不品行、つまり偶像礼拝のことでしょう。そして、その背後には、「意味の秘められた名」とあります。これは、「昔は隠されていたが、今、明らかにされる」という意味があり、つまり昔からあった存在だということです。

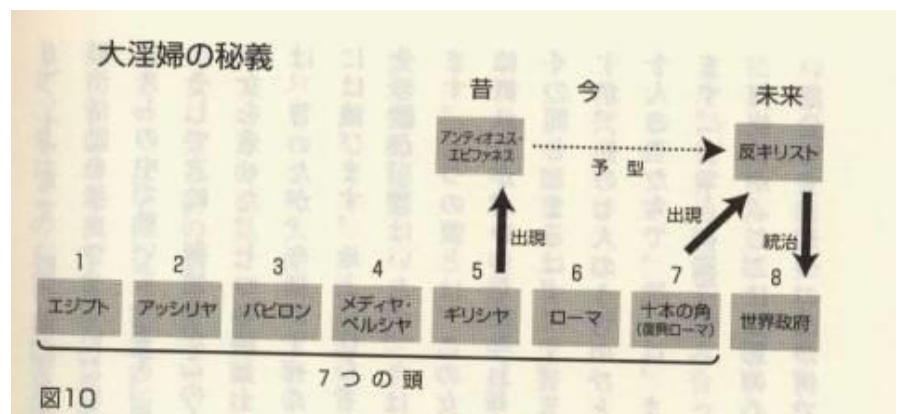
それを考える時に、バビロンというのは神に対抗する町として出てきます。エデンの園は、ユーフ

ラテス川付近に会ったと考えられますが、そこから蛇が現われてエバをだましました。それから、ニムロデが現われて、シヌアルの平地にバベルの町を建てました。そしてそこに天に届く塔を建てようとしていました。それこそが、天体を拝み、また神にまで届こうとする偶像礼拝であり、高ぶりでした。それに対して、主はバビロンの地域からアブラハムを呼び出し、そこを離れさせて、カナンの地に行かせました。そして、そこで主なる神が現われ、バビロンと対抗する形でエルサレムをご自身の都に定めるようになっていきます。しばしば、聖書では神と人との関係が男女の関係に喩えられます。それを誤った形で持っている時に不品行であり、偶像礼拝なのです。バビロン帝国がエルサレムを滅ぼし、バビロンには神々が祀られていましたが、その国を超えて、人々に遍く広がっていた、この世にある偽りの宗教、富を持ち政治力を持つ宗教文化の集合体であると考えられます。

ですから、異邦人の時には政治的に経済的に統一が行なわれるだけでなく、宗教的にも一つにされていきます。その世界宗教の動きは今、私たちの中で見ますね。教会において、イエス様こそ主であること、この方に救いがあるという福音を捨てて、他の道があるかのような偽りの平和を伝えている人々が教会の中でも増えています。これこそ背教であり、統一宗教への道であります。そして、獣がその女を載せていたのですから、患難期の初めはグローバル化された世界、復興ローマには、世界統一宗教によってまとまっているという世界があるということです。

そして6節には、真実に主を信じている者たちは、流血の中で殺される姿があります。これはとても厳しい現実ですが、教会史の中でまことのクリスチャンを殺していったのはカトリック教会でした。教会がクリスチャンを迫害するということです。なぜなら、世と結びついた教会にとって、キリストに結ばれた者こそが最も厄介だからです。そしてついに、獣の秘儀を御使いはヨハネに解き明かします。

7すると、御使いは私にこう言った。「なぜ驚くのですか。私は、あなたに、この女の秘儀と、この女を乗せた、七つの頭と十本の角とを持つ獣の秘儀とを話してあげましょう。8あなたの見た獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上って来ます。そして彼は、ついには滅びます。地上に住む者たちで、世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者は、その獣が、昔はいたが、今はおらず、やがて現われるのを見て驚きます。9ここに知恵の心があります。七つの頭とは、この女がすわっている七つの山で、七人の王たちのことです。10五人はすでに倒れたが、ひとは今おり、ほかのひとは、まだ来ていません。しかし彼が来れば、しばらくの間とどまるはずです。11また、昔いたが今はいない獣について言えば、彼は八番目でもありますが、先の



七人のうちのひとりです。そして彼はついには滅びます。

図を見てください。秘儀について説明します。七つの頭は、13 章で説明したように、これまでの帝国も含んでいるのがこの獣なので、イスラエルを虐げてきたその地域の大国という観点から見ますと、エジプトがおり、アッシリヤ、バビロン、メディア・ペルシヤ、ギリシヤ、ローマ、そして復興ローマがあります。十本の角は、先に話した復興ローマにおいて、十の連合体に分かれる姿であります。そして、獣ですが、「昔いたが、今はいません。」と言っています。これがダニエル書 8 章に出てきた、アンティオコス・エピファネスです。反キリストはそのギリシヤの王の背後に霊として働いていましたが、今はいません。しかし、第七十週の半ばにその正体を現します。そして、「昔はいたが、今はおらず、やがて現われる」と言っていますが、やがて現われるのは反キリストのことです。

それから、七つの頭ですが、「五人はすでに倒れたが、ひとは今おり、ほかのひとは、まだ来ていません。」と言っています。ギリシヤまでは倒れましたが、今ローマがあります。けれども、復興ローマにまでは至っていません。そして、「また、昔いたが今はいない獣について言えば、彼は八番目でもありますが、先の七人のうちのひとりです。」というのは、ダニエル書 7 章の話を出していただき。十本の角の間から出てきます。だから復興ローマにいる十人の王の中から出てくるのですが、彼が世界政府の総統になり八番目になるのです。

12 あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らは、まだ国を受けてはいませんが、獣とともに、一時だけ王の権威を受けます。13 この者どもは心をつにしており、自分たちの力と権威とをその獣に与えます。14 この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」15 御使いはまた私に言った。「あなたが見た水、すなわち淫婦がすわっている所は、もろもろの民族、群衆、国民、国語です。16 あなたが見た十本の角と、あの獣とは、その淫婦を憎み、彼女を荒廃させ、裸にし、その肉を食い、彼女を火で焼き尽くすようになります。17 それは、神が、みことばの成就するときまで、神のみこころを行なう思いを彼らの心に起こさせ、彼らが心をつにして、その支配権を獣に与えるようにされたからです。18 あなたが見たあの女は、地上の王たちを支配する大きな都のことです。」

11 節までの大淫婦の姿は、患難期の前半を特徴付けていました。けれども、ここにあるように獣が他の王たちと共に淫婦を倒します。そして後半は自分自身を神としていく、人工的な偶像礼拝を開始するのです。

### 3B 火の裁き 19

しかし 14 節にあるように、獣は小羊に敗れます。この方と彼は戦い、滅びます。その姿がはっきりと表れているのが 19 章です。

19 また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。20 すると、獣は捕えられた。また、獣の前でしるしを行ない、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。21 残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥が、彼らの肉を飽きるほどに食べた。

このように獣と、偽預言者であるもう一つの獣が生きたまま火と硫黄の池に投げ込まれます。コラがアロンとモーセに反逆して、生きたまま地が割れて、陰府に下ったように、彼らも神とキリストに反逆したので、生きたまま地獄に投げ込まれます。このように、私たちの生きている異邦人の時は、反キリストの現われをもって最終局面を迎えるのだということを知りましょう。そして彼は必ず滅びます。

#### **4A キリスト者の姿勢 2テサロニケ**

そのような中において、私たちキリスト者の生き方を最後に見ていきましょう。テサロニケ第二1章から眺めてみたいと思います。4節から読みます。

##### **1B 苦しめる者への苦しみ 1**

4 それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその従順と信仰とを保っていることを、誇りとしています。5 このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであって、あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。6 つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。8 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。9 そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。10 その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の…そうです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたのです。…感嘆的となられます。

異邦人の時は、イスラエルにとっての苦しみ、エルサレムが踏み荒らされることのみならず、イスラエルの神を、イエス・キリストにあって信じている私たちにとっても迫害と患難を耐えるということにつながります。そしてイエス・キリストの再臨は、その苦しみを与えた者たちに対する報い、同じような苦しみを与える時なのだ、ということです。

そして、私たちが善に対して悪で報いを受けます。福音を語っても、拒絶されます。生活が不利になっていきます。しかしそのことに真面目にならないことです。なぜなら、正しい報いというのは神がされることだからです。報復という神のご性質、働きを受け入れる必要があります。復讐を神

が必ずしてくださいます。そして人にした悪と同じ量りで、その人に対して災いを神は下されます。神は公平な方だからです。イスラム国の戦闘員が少女を凌辱し、性奴隷にしているのであれば、神は同じような量りで、その者を辱め、苦しめ、卑しめられることでしょう。ですから、すべてを主に任せします。むしろ、そう言った悪を行なっていれば、彼らこそが神の恐ろしい裁きを受けなければいけないことになります。ですから、憐れむのです。そしてその人のために祈ります。「ローマ 12:19-21 愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」

## 2B 引き止める者 2

そして次、2章では、異邦人の時において、私たちが「引き止める者」としての役割を担っているということを知ることができます。

1 さて兄弟たちよ。私たちの主イエス・キリストが再び来られることと、私たちが主のみもとに集められることに関して、あなたがたにお願いすることがあります。2 霊によってでも、あるいはことばによってでも、あるいは私たちから出たかのような手紙によってでも、主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。

1節では、地上再臨と携挙のどちらもが書いてあります。再び来られるというのが地上再臨、そして主のみもとに集められるというのが携挙です。今、主の日、つまり神の怒りの日、患難が来たかのような噂話には、惑わされないようにしなさいと彼らの信仰を守ろうと、パウロはしています。神の怒りから救われるからこそ慰めを得ることができるのに、神の怒りを受ける、しかも今、受けている苦しみがその怒りの現れた、と言っているのはあまりにも苛酷な言葉です。しかし、次にはっきりと主の日が来ることの徴を教えてくださいます。

3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。

まず背教がある、と言っています。背教とはもちろん教会の中で起こります。そして、福音の真理に対して離反する、背反することです。ペテロ第二、ユダの手紙で、教会の中から出てくる偽教師のことについて警告しています。先ほどの、バビロンに取り込まれていく宗教への成り果ててしまいます。この背教が起こって、それから「不法の人」あるいは「滅びの子」とも呼ばれ、そして他の訳では「罪の人」と呼ばれる人が現れます。彼は、ヨハネ第一によると「反キリスト」とも呼ばれます。主の日について語るのであれば、大地震、戦争、疫病、飢饉なども前兆ですが、反キリストの現れこそが、その始まりであります。

4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。

七十週目の半ばに、聖なる所に入って神であると宣言する、ということです。一つに、人間より超越した存在に対する激しい嫌悪と対抗意識、反抗があります。イエス様が十字架に行くとしていた時に、ペテロがいさめましたが、主は、「下がれ、サタン。」と言われたのです。その背後にはサタンがいたのです。このようなサタンの霊がペテロを捕えてしまったのです。そして反キリストの特徴は偽りです。

5 私がまだあなたがたのところにおいたとき、これらのことをよく話しておいたのを思い出しませんか。  
6 あなたがたが知っているとおりに、彼がその定められた時に現われるようにと、いま引き止めているものがあるのです。7 不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。

ここで、引き止める者がいるので、不法の秘密、すなわち反キリストの霊は働いているのだけでも、完全に正体が現れているのではない、ということです。

パウロは、「不法の秘密」はすでに働いている、と言っています。使徒ヨハネも、「今や、多くの反キリストが現われています。(1ヨハネ 1:18)」と言いました。反キリストは必ず、一人の人物として現われますが、秘密としては、あるいは霊としてはすでに働いています。そのことをダニエル 8 章で学びました。そこで、引き止めているものがあるのです。反キリストの霊を引き止めるのは、唯一キリストの御霊のみです。イエスが神の子キリストであると告白する霊のことです。これがキリストの御霊です。私たちのうちにおられるキリスト、またご聖霊が、この引き止める方であります。クリスチャンは、世の光として、地の塩として召されています。このキリストを証しする教会が引き上げられると、反キリストは自分の姿を完全に現わすことができます。

8 その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。9 不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、10 また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。11 それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。12 それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。

これまで来て来ましたように、不法の人が現れたらキリストがそれを滅ぼされます。そして、その背後にサタンが働いていた訳です。そしてそれは偽りの不思議が伴っていたのです。そして、人々はそれを称賛します。ですから、滅びる人たち、つまり福音の真理を受け入れない人たちは、悪魔の欺きに一気に晒されることになります。主の来臨が近づけば近づくほど、悪魔は猛威をふるい、悪魔の欺きがはびこります。したがって、福音の真理を愛さないもの、真理を求めず、自分の考えて



いること感じていることを優先する者は、自分を不法の人の欺きに自ら従わせていくようになるのです。終わりの時の霊の戦いとは、実は、偽りとの戦いです。もっともらしい、正しいことが、世界に蔓延します。この虚偽に対して、私たちは霊の武器をもって識別し、分別し、その偽りを明らかにします。そして、自分はイエス・キリストのみが真理であることを証しするのです。

### 3B 愛され、選ばれた者 2

そして異邦人の時に私たちに必要なのは、「神に愛され、選ばれているという保障」です。

13 しかし、あなたがたのことについては、私たちはいつでも神に感謝しなければなりません。主に愛されている兄弟たち。神は、御霊による聖めと、真理による信仰によって、あなたがたを、初めから救いにお選びになったからです。14 ですから神は、私たちの福音によってあなたがたを召し、私たちの主イエス・キリストの栄光を得させてくださったのです。

これまで見たように、恐ろしいさばきが神によってもたらされるのですが、パウロはテサロニケの人たちには、「神が、あなたがたを初めから救いにお選びになったのです」と言って、彼らを慰め、励ましているのです。パウロは注意深く、「初めから救いにお選びになった」と言っています。子の初めが大事ですね、私たちが何か良いことをしてそれで選ばれたのではなく、何の行ないもないときに選んでくださいました。その憐れみに基づいて大患難から救ってくださいさるのです。クリスチャンたちが、この恐ろしい主の日を経験しなければならぬ、というのは、謂れのない噂であり、パウロたちが宣べ伝えている福音にもとづくものではありません。だれでもキリストのうちにある者は、必ず、キリストによって神の怒りから救われるのです。

私たちは、自分で忠実だから救われるものではありません。神がしてくださった恵みによるのです。ここに、「御霊による聖めと、真理による信仰によって」であります。主が御霊によって、私たちが世から聖め別つようにしてくださいました。そして、私たちは真理の言葉を聞きました。それこそが、選びを確認するものであり、必ず救いをもたらすものです。私たちは福音によって、神の召し、イエス様の栄光へと変えられる定めを受けています。

～～～

今の世界、また国内状況の揺れを見て、もう既に患難期に入っているという意見が、キリスト者の間にある。私はとんでもない見方だと思っている。聖書の、大患難における破滅的出来事を読めば、今、起こっていることは序章にすらなっていない。今は一リットル程度の水で、後は何百トンの水がやってくるようなものだ。むしろ今は、神がご自分の怒りを下される大患難の前に、それが来ることを注意喚起している前兆である。

もし、ノアの時代における大洪水が歴史事実として起こったと信ずるなら、これから同じような世界的な天変地異が起これないという事は決してできない。いや、ペテロ第二3章によれば、過去は

水で裁かれたが、これからは火による裁きが来ると、明確に使徒が語っている。そして、火による裁きも、既に歴史的出来事としてソドムとゴモラに下ったのだ。

我々キリスト者は、これらの裁きを受けるに十分に値する者だ。しかし、神はその怒りをすべて御子の十字架の上に置いてくださり、ただその十字架に抛り頼むことによって、救いを受けている者である。あの小さな、ローマの処刑台に自分の全ての人生の安寧がかかっているのだ。そして十字架の言葉を逃す者は、そのまま神の怒りの杯を飲みほし、災いの霰を受けなければなくなる。

そして私はロトのような者であり、心が鈍くなっており、世に妥協してしまっている者だ。けれども、それでも主はロトを救われた。その火を降す前に、彼が出て行くまで待ってくださった。同じように、主は憐れみによって、来る患難から救ってくださる。だからこそ、主を畏れかしこみつつ、人々に罪の赦しを与える福音の言葉を伝え、また正義の住む都に将来住む者として、生活の中で証しを立てていきたい(2ペテロ3:13-14)。

～～～